

尊 師 四 影

小 林 貞 七

その 1

“かに”については世界的に有名な元横浜大学教授の酒井恒先生とのおつき合いは 25 年にもなる。それは、本館創立当初に私たちの収集した資料（主として甲殻類）の同定をお願いしてからである。このことがきっかけで、昭和 27 年来毎年欠かさず真夏の 3 日間に、吾が館の海浜動物の学習会の講師として、ご指導下さることになったのである。

甲殻類特にかには勿論のこと、海の動物全般について、先生程に詳しい学者を私は知らない。毎年の学習会の度毎にその感を深くする。先生は相模湾などで陛下のご採集やご研究の場には、しばしばお臨みになる由である。特に夏にはお忙しく、沖縄諸島のかにのご研究に打ち込まれるのであるが、その内の 3 日間をご割愛下さって、私たちのためにご指導下さるのである。先生は方々からの懇請にも一切お出掛けにならないのに、吾が館のみは毎年変ることなくご尽力下さるので、まことに有難く嬉しく思っているのである。

例年の学習会には小、中、高校生及び父兄等と雑多な参加者だが、そのご指導はきわめて懇切で、小学生には小学生の程度に応じ、高校生にはその能力に即応してのご指導は堂に入ったもので、ともすると高名の学者にあり勝な相手無視の指導とは全く趣きを異にしている。また、先生は毎回ご自分で撮影された見事なスライドをご持参下さって、海の動物の説明を興味深く展開されるのも先生ならではのことである。

先生には幾多の著書がある。先年は大著シーポルト・ファウナ、ヤボニカにご執筆になった。当館の嘱託伊藤十治氏は 10 数年前先生のもとに 1 年間留学したことがあるが、今もって昔に変わらぬご指導を頂いておるとか。

その 2

本館が開館当初収集した海藻標本は、北海道大学の山田幸男先生に同定を願って 109 種程が整理された。しかしその後に採集したものもかなりとなって、また重ねて先生にお願いしたいと思っていた矢先に、先生はご旅行のついでと申されて、当館に立ち寄って下さったのが昭和 48 年の初夏だったと思う。よいとこ幸いと同定をお願い申し上げたところ、ご快諾を得たので、大急ぎで整理した標本 300 余点を、退官後の先生の京都のお住居にお送りした。

2、3 ヶ月してていねいにお調べ下さった標本が返送されたのは、その 3 分の 2 程だった。残りは明年札幌に出掛けるついでに、北大のかつて先生の手掛けられた標本と照合検討した上で、お届け下さるとのお便りで、その慎重さにはいたく感激したのである。

その後 2 年を経たが何の音信も頂けなかったので、さては何か変ったことでもあったのでは

ないかと不安な思いでいるところへ、昨50年9月に北海道大学の黒木宗尚先生からお手紙を頂戴した。それは、山田先生のお手許に残された標本について、ご遺族（奥様）の方からどうしたらよいものでしょうとの、黒木先生へのご相談の手紙についてであった。黒木先生は急いではできないことであるが、必要とあれば、先輩山田先生のご遺志について私が見て上げましょうとのご親切なお便りだった。

山田先生は昨年7月6日に亡くなられたのである。先生は病床にあっても当館の同定未了の標本について、心を痛めながらご他界なさったようと思われる所以である。その学術的な責任感や良心にひどく打たれたのは私一人ではない。早速にお悔みを申し上げると共に、ご迷惑を奥様にお詫び申し述べたのである。

その3

昨年の11月の底冷えする日の午後、突然に秋田大学の藤岡一男先生が、大学院生2人を連れられて当館に来訪された。藤岡先生は山田先生と同様に開館当初（25年前）に、本館の丹生山地の植物化石を同定下さった方である。

先生ご来館のご用件は、かつて同定下さった化石は20余年後の今日、大分学名等の変更もあるので、定年退官を明年（昭和51年3月）に控えて、再吟味したいとのお申し出であった。

火の気1つない3階の寒く薄暗い資料室で、お3人が2時間ほどもかけて1つ1つていねいにラベルの書き換えを終えて、なお、2、3疑問に思われるものには再検討するからと申されて持ち帰られた。院生2人は2、3日当地に滞在して、丹生山地の化石を採集して帰られ、後日、当館に所蔵しない化石まで加えて、さきに持ち帰られた標品といっしょにご返送下さった。

心おきなく退官されるために、20数年前に掛けられたお仕事にまでお心配りされる学者的な良心や真摯さに、ただただ頭の下がる思いである。

その4

東洋大学の大野正男先生とはまだ一面識もない私であるが、お便りは何度も頂いている。それどころか昨年の博物館同好会誌には先生から進んで玉稿を頂戴するほどだった。

先生の原稿は、“ヒメハルゼミ福井県に産するか”であった。昨年の同好会誌の原稿ではいの一番に頂いた。しかもお出し下さった後も3度にわたって内容の変更による書き直しや一部訂正の申し出があった。それは、次から次へと新事実が発見されて来るためにそのつどの変更である。これが高名な学者の小博物館同好会誌の原稿に対するご態度である。その学術的良心と厳しさに大きな感動を覚えたのである。

私は先生のこのひたむきさに対して、きっと福井県にも生存すると思われるヒメハルゼミが確認されないまま一年が終ってしまったことを申し訳ない気持である。先生のご熱意ほどに私

たちの熱意がこもらなかつたためかも知れないと、いささか自分自身を淋しく見つめている。

先生は両三年来吾が同好会誌に非常な関心をお持ち下さると共に、毎月にお届けする博物館だよりも詳しく目を通され、そのつどいろいろとアドバイスを下さっている。お忙しい中を余人のまねのできない業と感謝している。

昭和 50 年 11 月記 博物館長